





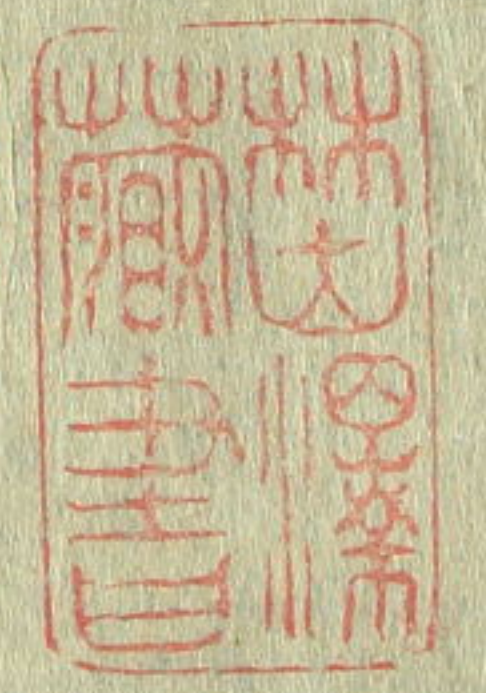
日本歳時記卷之二

正月之下

十四日 門松 燈籠 繩しなと云い今日 兜かぶと奉たてまつ此 籠かごより 大おほなる 繩しなと  
教しやく人ひとおつとひくわくそい引ひるわくこれと繩しな  
引ひくつとわくより事ことなり

梅うめすりる 案あん時とき記きよりく 立た春はる日ひ施ほ釣つり之の歌うた以もつ彼かの地ち  
篋かぶた鏡かがみ相あひ冒む綿わた巨こほろ敷しき墨すみ鳴な鼓つづみ牽ひ之の按おさ之の輪りん子こ遊あそ盤ばん  
為な載の舟ふね之の歌うた退ひ別わか釣つり之の進すす則すなは強か之の名な曰いは釣つり落お途と以もつ  
釣つり為な歌うた起おこ此これ繩しな引ひくお似にたり事ことなり  
○と和わ者もの番ばんあく白しろ拵ぎ判はん金かねいふくくの物もの也なり

日本歳時記卷之二





折敷まつ〇菘菜さきく人のそと人折敷のれと  
 さんとその目入り入く悪くあつては方より取  
 てろれ折敷よ米飯をいふくものあつてせ  
 折敷一人りて飯をわめくよとあつて  
 ちよけいしひのーあつてわつて國さくさび  
 ことよ國さくさびつりこふとあつて  
 〇西國さくさい日勝書よんゆ候よれやへんら  
 いらよおさきく菘菜とつりて地をあらはしと  
 るめんころや東國さくさい事おさきくげふか  
 ちあ事候よさくさびつりて何せんせびーあ

礼義よ書きあくつりてさくさびつりて

梅すくよもろろつりて中元日よ候とつりて枝よ  
 けく菘菜よよとよ扱とつりて金物れくさあこれ  
 つりてつりての風俗ありと荆楚記よもつり  
 又荆楚記よつりて今州人西月十八日立干糞  
 掃造令人執杖打糞堆云以答假痛意者ふ  
 礼義有事耳これとつりてさくさびつりて  
 おおつりて事あり

十五日今日とよえつりてつりて気返おれ候あり  
 松原連縄とつりてつりてつりてつりてつりて



つたふくやけは火災の變あり爆竹の火より  
回祿をまゝするの凶年を多し奇れは家道も  
不又ハ宅世もくハ電ハ下ハ燒ハ一風狂なり我  
つたハ燒も又可なり

爆竹といはれり  
ちりちりちり

我國ハ今日爆竹する有電燈あり  
り初めし事よりくあり元日  
一爆竹すまハハ勝越忍と勝くし事  
内記よりんえより又降おとまことんこれハ  
玉舞ハゆおも爆竹を中一葉深と他より  
此ハハ漢ハ武帝ハ大ととまことん  
結成り

おれわくらまぞと事乃始として  
焼のるり又一月全村を燒と後くし事  
所なき事よりより天と一月廿五日  
あつまりて焼とより一仙金村とんりあり  
爆竹乃より所ハ日本乃ハはらくハ  
いハはらくハ漢ハ武帝の内初と  
もろくハ佛法と下ハ道士とや  
ひと張ふらんてろれまろくハ  
とたよおるた全れ書と右ハ  
道全の書焼よりり重ハたハ義也なりといひて



左義也云又西城義也や事也云々や  
多部乃修之爆竹と西域解は此義よりして事也  
海布すといふ事なりと云い是ハ波江のり  
と事なり事なる事ハ我道と卷方なりと云い  
事なりと云い乃我を授くと云いたり又  
おれ沈まらざる是將来と調伏の威徳ありと云  
三爰杖燒音會ハ二義退治れといふなり  
曉明の蓋蓋内修り方々修れと云い又蓋蓋乃  
修り事ハ蓋位するなりと云い但し此の事  
傳和元日なる爆竹と云い事なりと云い

我國ハ今日するも一甚乃修り事ハ一年  
乃修り事と云いハ數日なる事なりと云い  
十二月廿二日爆竹と云い一范到終の修り事  
修り事ハおれづつ傳和元日との事なりと云い  
わく事なり一凡爆竹ハ修り事ハ修り事ハ修り事  
と修り事一修り事と修り事一修り事ハ修り事  
一修り事ハ修り事ハ修り事ハ修り事ハ修り事  
勢名曰ハ修り事ハ修り事ハ修り事ハ修り事  
修り事ハ修り事ハ修り事ハ修り事ハ修り事  
修り事ハ修り事ハ修り事ハ修り事ハ修り事  
修り事ハ修り事ハ修り事ハ修り事ハ修り事



かみすびん乃る先子孫不憚とてうりあふ  
くれとてきされ奇食共く為所汚濁人  
ありく爆杖と教くられ所依乃樹と焚き  
しん道に從くや世朱子乃てく他社祀  
氣未教杖爆杖警教了又焦氏智業よ字取  
後中集を引ていしく爆作妖氣と辟事位死  
はる都人の伴雙といふものあり心鬼乃るあよ  
崇となされて戸牖と開くや何さういひ心鬼  
と成りよ瓦をと投く妨とて火雙巫聖と  
取くこれといのりなれば却て妖業とてい

いしくけりんちり吸これの習くいしく日夜  
中よゆわく際ぬれく爆作すゆり教十  
竿せよ雙る杖と投りて爆作とて  
呪よつて心これより妖業乃事やとて  
あここの杖杖とていしく又まの爆作乃杖杖と  
辟くしり杖杖ありとあわさる  
○今釣小魚粥と考て徳とす一てこれと今次  
漢の神その杖杖あよと十日なりらるれとて  
いしくけりし事なる意事の語より初  
とるや又七種杖杖といふハ未業赤とてい







胡麻子小豆也と述哉或は刀をえり又九條丸右座  
 おれ記の白穀すめあつる粟粟棒さけり  
 かんしきちりせり正月は地葉粥防風第葉種粥  
 むしとくくを人よふるしきといふ事一申金月  
 今よこえり

世風記の正月十五日小豆粥と書く天狗粥と  
 かなす意平は粟と書くは(一)粥と(二)を  
 その粥凝りたふふじりいふも也粥して乞  
 とねもふ不夜守をしと(一)いふ外後奇信  
 祀制歌叔の兵苑をといふ海く乃流信也といふ

好もおれ記に(一)て信ずる(二)たりす(三)おぼ(四)す  
 一正月十五日膏粥とほりて(一)は(二)と書  
 とちりたり又新葉葉内記を正月十五日  
 糜とけりて油膏と(一)の(二)く(三)く(四)と  
 中つくと(一)え(二)り(三)肝(四)令(五)ふ(六)ま(七)と(八)書  
 ぶ(一)とい(二)ふ(三)り(四)は(五)は(六)い(七)も(八)る(九)ん(十)授(十一)と(十二)六(十三)と(十四)書  
 ○今日銀葱考姓乃盡糸よ書海と(一)と(二)か(三)新果  
 とす(一)む(二)へ(三)一(四)無(五)形(六)を(七)日(八)合(九)小(十)う(十一)の(十二)は(十三)ぐ(十四)り  
 しく(一)と(二)一(三)様(四)子(五)の(六)書(七)久(八)ぶ(九)お(十)れ(十一)の(十二)ま(十三)り  
 ○枕蓑あふ(一)と(二)く(三)十(四)日(五)ふ(六)か(七)の(八)本(九)を(十)た(十一)か(十二)して



したぬののきりりひひ  
 ぬれつゝら女房をみゆるをうたはる  
 してはぬまうしあつらふ人志うらう  
 たりふふいづく志をうらわしくうらひ  
 けうけうありうらひたもて  
 一あゝ又接衣衣の巻よしく年をかくぬ  
 十女ふひふふしくまかこひむいかに  
 ねりまききの張杖引くつこまふい  
 まうぬまうとまううらふまふぬひ  
 るいぬのくがううかんめしむね  
 ぬのねみちぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
 ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

しく女房として歌ふとまひそらうのかり  
 ぬれつゝら女房をみゆるをうたはる  
 してはぬまうしあつらふ人志うらう  
 たりふふいづく志をうらわしくうらひ  
 けうけうありうらひたもて  
 一あゝ又接衣衣の巻よしく年をかくぬ  
 十女ふひふふしくまかこひむいかに  
 ねりまききの張杖引くつこまふい  
 まうぬまうとまううらふまふぬひ  
 るいぬのくがううかんめしむね  
 ぬのねみちぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
 ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

種彦集原言卷一



やういふものも又慰みの不月を待として人と  
あやましく決

○今秋の一年十二夜の圓月が始まりあま  
ら何れんかと言われ月に出ればいふ事うわ  
な波の裏にまゝ入れば深き水と云ふは月と  
もて何れいふ春月秋月も秋月色は月色  
令人懐懐喜月色令人懐懐といひ一車  
越は麟の候種梅の月とていふふ載集の上  
門流老翁

花のいろよひるを市うよまの秋のこゝろの

月を月々くうきり 新古今集よたは子里

てりもせひこのおもてはまは秋のやう

月夜小志くものろのま

○今夕まゆ乃とていふ事と云はれ之を命と撥  
すし形念廣義のうへり

十六日 國信は日遊集と事とす

○新集よ海魯の人多く正月十六日とていふ  
寺観小あそぶこれと云ふはとていふは  
もろとていふは日遊集とていふは

○又今日 結怨持方 奴婢の宿居 後よあやまらう



とく主人は一日の暇を乞て家々廻り父母兄弟  
親戚を福す

梅と家々又お氣遣ひ執念吾ハ家内中乃志の  
おしと整ずり奉と廻り夜あり唯正月十  
五六期云くお後前一日梅とゆくらこれ  
と放夜といてゆるむしみの圖おしかれ  
事しゆかといんえたり

廿日今日女人乃鏡着の祓とてうまじ儀ありし  
鏡鑑と羞食ふ事ありこれ我士此鑑乃鑑と  
いとふとひくこと事ありおんともらゆら

晦月沐浴

○凡貴家人功なき一は家内掃除  
とましくお掃除するりゆきありこれハ毎月  
晦日に家内掃除ありおなく掃除ぬれだ  
正月月中掃除をゆるたすして人功とらぶ  
これとてお掃除ありて毎月晦日ハ  
乃は何として文中と掃除すじつ  
延表式おんたり







苗列御史尚書命羽回於恒會客於樸

玉紅春酒香

去れとも親戚すくなり人越はみ子兒をそ水  
心も親密なりともづるお清の地とて

十月元日 一り晴日よ通すく世俗小歳酒杯や  
紹り幸なり厚林門答元陰酒入ると周  
徳とあやうと久あふ美酒の方ハ一年の  
乃玉徳乃方なり者十干の徳あり徳十干此  
則又と酒徳とす甲酉戌庚壬これなり又と法  
徳といして丁巳年癸と通なり甲の美酒を東

富甲の方には此酒の美酒を南と酒の方  
在戌の歳徳を中宮戌乃方とあり、庚の美酒  
を西宮庚乃方とあり壬の美酒を北宮壬乃  
方とあり、己と平此美酒は皆陽徳といふあり  
そ方にあり又乙乃歳徳を西宮庚の方、在  
丁乃歳徳を北宮壬の方とあり、己は美酒を東  
宮甲の方とあり、辛の美酒を南宮乙の方と  
あり、癸は美酒を中宮戌乃方とあり、乙丁巳年  
癸を歳平とす、あまたおのづか酒を、湯に平  
又配合して徳となす、とて、己と甲の妻







日月の姿とてつるありあり揚るるに應孔大なる物  
 以て象其祀日月星辰多義云然日於壇祭月於  
 坵楊氏云春分朝日始於夕月此祭日月之正  
 終也賈應傳傳云二代之記云天子喜朝日秋  
 暮夕月鄭氏云祭日也壇祭月西壇顧氏云朝  
 日也朝夕月也暮法迎其初出也 日月を祀す於其  
 出也其勢速考より  
 これら天の日月の姿一終事とてより一祭  
 祀人皇の十二代後孫天皇の御時天照太孫の  
 御時よりとて神代の祀春日大明神より二十四  
 代以降神代終りの神代終りの御時よりとて神代終りの

事とて之を言ふとて魚味とてるるに神代とて言ふ日終  
 とて言ふ一は神代より日終月終の事とて言ふに  
 一は今乃世俗士庶人より言ふて俗とて言ふ一終  
 とて言ふ世終とて言ふ事終食とて言ふて日月  
 の事とて言ふ一日終月終とて言ふ天子にわたり  
 て日月とて言ふる事とて言ふ事終の終にんれん  
 事終る事終るこれな事とて言ふ一尊のた  
 だ事氏のたより終樂とて言ふ一八終一とて言ふ  
 終事とて言ふ孔子より言ふて是とて言ふ  
 終事とて言ふ孔子より言ふて是とて言ふ







おひらの神よあわさる書あつたてししわす候  
 具とさる人邪位と候とて天子にあはす  
 去る日月とあつ事いさうしは返神あり  
 元始終れあすとなひ人を福さくしと思ひて  
 福ありといふや天路日月と識候の事いさう  
 とや我日月と久しき事人といふるふあは福  
 若くはあつるもあは福と候はりそのもさ  
 天邊神明のあつるもあは福と候はりそのもさ  
 し強まのあつるもあは福と候はりそのもさ  
 の福とさるるもあは福と候はりそのもさ

乃邊理をうしんわとうれ候ししは事あり  
 又偽如命世紀の神とてうけく神つう方道  
 と法人よとてあつるもあは福と候はりそのもさ  
 し神明とあつるもあは福と候はりそのもさ  
 佛法とてあつるもあは福と候はりそのもさ  
 邪言の肉神とあつるもあは福と候はりそのもさ  
 とゆりされすあつるもあは福と候はりそのもさ  
 の三綱の佛とあつるもあは福と候はりそのもさ  
 あつるもあは福と候はりそのもさ  
 とい尼とあつるもあは福と候はりそのもさ



ハセオと云ふ又おのせきありこれ神明たふく  
いこふひつらあるれきと云ふいふと云  
たぐらもく羽と云てとある事かたきと  
あるまふ今日徳月終して日終月終とまつり  
をくふ信と強し終ての事と云ふ一神めと  
けりしものありあれざりあるたふすものあり  
きりりあるぬるれつとぬくおんえはの信人  
を智く考せざりもそのあたまのなる人  
多し天地神明の事と云ふて信まこの事  
しうまふことと云ふか天地終つたかといふ

む身代りざりひとをら幸必終つて人世人  
これ理ともうくし終まきりか天地終つたを  
とくくはこれいさく妖巫贗偽の事と云ふにあり  
るひてまふと強しと云ふあると云ふ天地神明の  
たぐらと云ふと云ふは信しものあり世信のあや  
まりに智く考せざり人の信と強しと云ふもの  
又世信は唐申終つてと云ふものありあれがらひ月  
のまふまふと云ふと云ふは日終月終の事と云ふ  
るあれはこれいさく信の事と云ふと云ふと云ふ  
凡唐申の日は人との事と云ふと云ふ唐申と



宇之の三戸をらびここひ庚申とちればこ  
尸休す又大年廣記よしく勤ま三屍代姓  
常よ人男乃中みわきも飛とうこひ  
一庚申の日よ起りこに上帝よ御あり  
他とまあぶまのまけ三屍と後一かくたて  
なまばとれんら張仙ゆ一たと感應編一  
よくとる乃神とまき人乃け男の中みり  
人の善惡こよく考まき庚申乃星と上  
三屍代星のわまひおれ天曹乃まのよんて此  
人まきうごまの起事と知れひてと異

おぼくろれ人乃あまらたなれば恐り一紀  
十二年乃壽命とうひひ少きまじ一算六千日  
乃命とうごまあまおまきと神まきのほ一  
てこれをとけしありの起る起れあひ認分  
んふ後ずらまたしくや機善れあひの機を  
何の機不善乃家小の機徳ありと聖人乃教  
あき心機の理まきとまのまよを善くとた  
庚申の夜録まきしておひぬまのまを機と  
まのぬまはくとまの人は悪とせよとてむお  
おれ一を善とあして機と悪おひまのめ



小取あるき程りとて去るざらるやとんや庚  
申しにせしむるの勢より義のあはざるは取柄の  
らびて終明よとてふとよふ今世の俗これと  
まると懐念とてまうとて庚申とせりと稱と  
あやまりりよとれ阿原よりあつて又取柄  
あく庚申の標取大程乃取らるは日あき  
中れ大程とまらるよとんを信じてこれ又  
附會の儀あり又庚申金あり申と金をり  
金と金と刻する日あきつてしむ日あり  
しあふ中ふ土とておぼしめすとてとらる

是又響候ありと竹のお刻とてとて庚申  
あまもやうたつてふ儀よむあこの事あき  
是れゆりたる流儀よとてらば此終候あは  
るよとてとらばとて可ありとては柳の葉に  
と墨文ありと墨取と取柄のりて取柄の  
り文に取とてとらり又信史候ふ庚申の  
歴生れ種法ありて種氏をいふとてとて  
海原とてとて此候ありと事とてとてとて  
取柄の取柄よとてとてとてとてとてとて  
とてとて又は取柄のりとてとてとてとて



神部別り行、名を初共守康申とありに  
と、名務り用居代備り、名高指申ふ石  
お康申しとあり

廿二日又九月とては二月と揃ふ事  
中、毒みせめれどくありて、名又籍紙上  
正又九石と友康より、名いふは、名正  
小とく佛法、名此之凡、名為齋素月、名不宣、名籍  
是破、名信人、名今急、名師官、名命下、名別任、名初石、名お米、名之凡  
る差、名誤る、名少、名外、名友、名申、名不、名宣、名之、名悉、名る、名初、名改、名又、名多、名作  
石、名思、名之、名甚、名也、名し、名り、名又、名御、名部、名代、名群、名録、名し、名と、名く、名正、名大

九月、名石、名上、名友、名戴、名地、名り、名そ、名く、名親、名氏、名乃、名多、名衛、名よ、名天、名帝  
我、名多、名後、名と、名と、名く、名正、名大、名律、名別、名と、名と、名く、名凡、名毎、名月、名一、名と、名び  
梅、名一、名て、名人、名乃、名善、名也、名と、名多、名守、名此、名之、名月、名有、名職、名部、名別、名と  
て、名此、名所、名人、名と、名れ、名と、名く、名正、名刑、名と、名ひ、名り、名今、名日、名三、名長  
月、名正、名徳、名因、名と、名く、名康、名幸、名と、名い、名す、名む、名石、名上、名友、名康、名世、名因、  
之、名と、名あ、名ん、名と、名く、名と、名く、名正、名金、名ハ、名深、名康、名氏、名乃、名初、名り、名初、名て  
傷、名家、名社、名は、名あ、名れ、名と、名く、名名、名也、名と、名揃、名す、名と、名く、名及、名つ、名凡、名世、名人  
多、名く、名す、名じ、名拘、名と、名よ、名も、名の、名ま、名り、名て、名可、名あり  
そ、名ろ、名く、名毎、名と、名あ、名月、名は、名権、名権、名乃、名像、名と、名因、名一、名と、名思、名と、名康  
と、名月、名人、名乃、名康、名義、名乃、名又、名と、名り、名我、名國、名乃、名初、名権、名乃、名手



世不久一之能修えおしり作りも結とつた  
を拂せり志有りゆきへ唐逸史より記す  
年中経途とよその科率小悪せり  
世より事と能く清く結ておす事此れ  
くれと袍帯を結りて葬せしむぬ明皇  
或年乃四月元日の夜此夢より人々の鬼  
り、虚耗と稱して玉苗とぬとむ時一  
て小鬼とそとてこんとて明皇を  
こまがりつと四つハ結く  
至し経途より口を死せし時袍帯の葬と

解らるる紙意の世世と報せんが  
耗乃鬼と清くとりん結ひて身  
号遠生よ命より丹徳と圖してこれと  
は之らより一とめんまをその  
あるまゝと経途張氏謝物経途表  
よりお流よぶ事ありこと久し  
拙志よしく経途唐乃明皇代  
はくあり物ありゆきと老  
を辟邪干詠言ハ経途家代  
経途たぐ葵と旭と葵同して







何くそひ難し遊とまむび理明らるるバツカ  
けりしうたふあしとまらへし

八月 樹木と稲穀一 西月と本と 仰り上時

之を裁し入るる枝と切く地を挿し此月

すし又記書と稲穀の色け月を布し

廣義のまじりしりしるる稲穀の氣とぬき

野澄とらなるや巻政全書よりとく 元徳若木

と植るふし弦乃後上弦の糸すし

八月と地舞八月の澄く整あり御とて舞

氣を澄しり時木の生舞全く枝葉よりなる

移すばも物とやぶる持木とればも木とやぶる

又いしく元果木とゆゆり中先九月乃中代後

樹れまうりと地く縄とひきまうりとかきまうり

しりおく少の肥土と入水と渡へし次年西二月

うらうらゆし稲穀の時土と中分けく挿しひ

おとつておひきくまうりしりやうらなる土と加え

地をうり二三可たうとまらうしとととまらう

く舞うく活裁くのら中月やい舞の氷と渡

八月 柳の枝と切て地を挿し速く舞とと月を度







歌陽云々 権花侍よ

激涼紅江宜和間先後仍須沈身裁我欲以成  
播酒七言教一日不花開

楊薄暮り云々後乃侍よ

三區初開先將卿馬用三區有剛明深意奄有  
云々連一區花并一區次

題云云 載仁杏侍り

白髮梅根送送送何年及見子垂老本但能  
深培植心向風花結子時

四月を致生代初ありある事とらるる事と致る事

粟とくひのひるあり事とくきむしとくこころ

むすれたる抽ひもどり秋乃子とあるは子かうれ

い事月念よ及えたり有子のとく樹本心成世

念秋以時教曾弘子乃日秋一樹教一歎不其

世也孝也これ孝義よありありと云り致く云

とふ時とく世下を不化を思はれらあま

天理へ乃不教ありと云る事あり

遠く縁よとく動意乃月天地理始方他世の

ある固密して志動と涉る事ありなる事

は月狸肉とくくハ彼とや梅と藝とくくハ骨と云



生蕙とく人の面は遊風と雲の又梨とくく  
くまぐれ又響居不河地ゆき落して飛騨  
乃氣と遊く  
月令廣義  
兼書

凡一年の七中二候あり六月と一候と一候と一  
氣と一候と一月と一七中二候と一年と  
四月より十月まで毎月各六候と云々と先  
四月乃六候才一候向氣凍才之登蟲始振才  
之魚上氷右立雲乃三候才り才曰柳生魚才  
又鰯魚小才云才本崩動たる水乃三候才り  
凡一日一候漏刻乃較とて百刻下刻ハ漏水の

肉より魚より菜よりと云々先乃較あり  
湯に煮るなりて量乃長短ひくくす  
量かぐす時を松下く取たり此時ハ冬  
一ノ一有二十四刻量乃たぐひは長短  
先より以下毎刻量乃長短と云々と  
先立量ハ冬二十四刻分取め十六刻  
十分合百刻あり而氷ハ冬四十分刻分  
取め十四刻十分あり凡六十分と一刻分

月令廣義  
二ノ二  
日守集時記卷之二終



日本采時記卷之三

二月

節と節の間に中と春分と云○二月の節名仲春の月今日  
節と夾持と云○二月の節名と春分と云○二月の節名  
節と夾持と云○二月の節名と春分と云○二月の節名  
節と夾持と云○二月の節名と春分と云○二月の節名

朔日 中和節と云

二日 今日と節朔と云や法陽記より云

○盃子乃生れ給ひ一日あり  
宣律考より云く厨北定王  
二十七年四月二日盃子乃生れ

今二月二日あり

○國俗奴婢と云く今日本より事年二月二日と云と  
今期より事年三月五日より九月方より事年  
今期より事年三月五日より九月方より事年  
今期より事年三月五日より九月方より事年











一六た考妣とすつる際ハ先祖より下と  
 参り孫子ハ多祖より下と参る一としての事  
 儀とけさすハを趣とむくゆハ義あり父母先祖  
 其我身の根本あり忘るハ其條ハ祭祀して  
 時を以てこれと云ふを遠くと置れん也此日一年  
 又日何り何附と云日なり何附ハ春ハ仲夏  
 用ゆ一其日ハ夏ハ秋ハ冬ハ春ハ二節  
 まつるも可なり是日ハ元日なり一年ハ元日也  
 和俗これと祥月と云毎月ハ月忌ハ古儀ハ何す  
 日本少く中比ハ此とれハ物事ハ厚きに注ぎ

素食と云ハ可なり春秋ハ参り忌日ハ参り何り  
 一ハ身戒一平生を食と後らぐくつハ節儀  
 と儀也一日本ハ元日ハ春ハ一ハ蓋蓋邊  
 豆ハ穀類器と用ゆ一ハ此考妣祖考の目録  
 たる物と用ゆ有ハ又を方々一ハ此参り肉  
 食と用ゆれハ日本少く今ハ魚名等ハ肉食と  
 一ハ此ハ一ハ此國俗ハ志ハ一ハ此宜小ハ之  
 古儀ハ志何ハ人ハ父ハ此終と考月ハ何宜  
 土俗とと斟酌して行ハ一ハ古儀ハ方々ハ國俗  
 一ハ此ハ一











土をよく万世と君のいふ教と生に故よるを農  
 事れよらんをとめり秋は是れ穀を種すこと  
 ともその日の穀の流れを成れ日を  
 与れれば後才の成れ日を種すこと  
十日の月 種記を仲春種元日命民社と有り  
元日八日 風俗通よそく若しれと信く不  
 舟車乃ちりそん足改れまはるし  
 子事ふ一衣に記て社記す左傳よそく  
 氏子有り句龍氏よ平水土衣不記し  
 後代郊持性小厲の氏乃天下と  
 農とよそく百穀ともは夏秋養ふ  
 業継之衣に種くは穰す共工夫の九州  
 覇方所をのふと唐土よそく九州と平  
 祀ていそ社すし  
東國のそく東百穀の梅柳の  
後代百穀のそく  
 乃社と為るも人民とを  
 ころはそ社日ある村民たが  
 酸飽をれそんそり張演の社日  
 後代人種と他より又は日れ酒  
 衣は酒酒と多つて海程事











此月日と推して、夜作を了し、西宿あり、人共二月の月  
 八日十月の夜、一七湯をせとたきけ、和紙ともせ  
 一、一月三、里級骨、七仕、灸して、毒氣と洩り  
 聚る、至く、脚氣、初ら、乃、候あり、と、毒氣、農書、を、た  
 一、り、夜、の、病、書、上、危、非、人、非、た、し、と、て、年、月、日、付、り  
 陽、之、禁、灸、の、日、あり、乞、事、問、難、經、を、よ、古、考、明、醫  
 乃、と、ざ、り、り、中、と、海、世、神、者、の、候、を、よ、ハ、位、も、り、に、是  
 すと、た、河、季、の、下、と、書、ハ、た、の、候、も、り、文、ハ、候、り  
 あり、秋、も、た、尺、候、も、あり、冬、ハ、肺、ハ、あり、と、之、を、書  
 問、乃、と、よ、かれ、る、よ、し、と、り、と、緘、全、醫、英、に、記、す

又、は、月、毎、月、以、上、候、り、と、二、百、竹、根、と、れ、ハ、毛、髪、と  
 申、當、初、く、考、と、書、ハ、り、の、時、切、ふ、丈、ぬ、の、事、と、と、之、と  
 月、令、廣、敷、と、り、て、り

天、等、和、暖、の、時、邪、外、少、邪、と、並、敷、し、て、血、氣、ハ、解  
 暢、と、り、

朱、子、乃、信、信、よ、り、と、月、終、り、仲、夏、今、今、男、女、と、り、又  
 那、終、り、塚、氏、の、後、ハ、法、陽、立、ハ、成、婚、終、順、天、時、也、と、り  
 是、ハ、ハ、月、を、男、女、嫁、娶、乃、礼、を、行、く、宜、し、と、り、月、あり  
 ハ、月、進、と、命、ハ、大、に、益、あり、と、千、金、堂、ハ、是、と、り、免、ハ、命  
 一、紙、と、傷、ハ、難、と、り、と、く、ハ、ん、と、や、り、ハ、英、也、菜、ハ、海、産、と



くくハ痼疾と名を繋ふと食するがらん大蘇と食  
て人をして氣あやうしむ小蘇とくくハ人の  
志性とやゆり最生政と食すと思又高麗の遠東  
を飲すと名を連瘴癘と名ひ 月令度義書者

二月ハ去候牙一櫛始第一二倉庚鳴牙三鶯化為  
鶯志 鶯鳴乃之候なり牙四之候なり牙五雷乃  
鶯鳴牙六始電志春分の三候なり  
鶯聲ハ晝四十七刻又十分夜中二十刻十分春分  
屋み子刻夜み子刻 月令度義

三月 節と深命と云中と較動と云○三月の庚名 季春癸卯  
種形 徳と始知と云○三月ハ和名と深起とノ真名也  
いそく風ぬりくすりて春來りやくさ  
いよのやおひ月と云と野なりき

二日 沐浴 艾膳と誓す  
三日 今日と重くと云又云 よ上の初と云  
やう一 二月初日巳の日と云く色す 一月を  
辰月を云い巳と深日とす 祈禱を深くさすなり  
沈約の宋書に魏より以後二月と用く己卯日  
相く成と云りゆく 今日文帳と云 桃花酒と  
のそ艾膳と新殿とと云  
今日文帳と云くさると考く 荆楚東海代り



三月三日鼠麴汁とろく密く合じ粉と和す  
 名付て麴粉麴粉とよみれと食と其の厭厭  
 報と毛のせり又お多しの鼠麴酒中山濃酒麴塵麴塵  
 晴字去去契契嗽嗽雜米粉合甜美ありとろくこれをそて  
 刀豆のりろくし鼠麴酒を用ひくまろり又  
 文徳家保才一考よ田田をよ多何の候よ母母を  
 多つく二月は始と生は草草を候してと候し三月  
 二月は婦女それとろく蓮一掃とて候とす信  
 えとえ草草をよとよとろく志うれハ我 屈中屈中一六  
 鼠麴酒を用ひくし刀豆のりろくはより鼠麴と

用ひて艾艾と用ひ事りしよ又又條條備備を候  
 小つらと周周の餅餅五五六六時時或人草餅を候とて或  
 王よ守候事とろく味の美たるととと候してとれ  
 餅餅珍珍物あり家家庭庭の批批せと周周ハ世世大大工工作作はは  
 本年と致致しとろく清清人人の事ととお候とく三月  
 三月は草餅を候り祖祖意意ににまま餅餅ののかかりり  
 大大人人ととままれれりりとと人人ととままるるももいい候候たたりりか  
 時時とと刀刀びびくくととああままれれかかととししととははととてて茶  
 餅餅ととすすととままりりととわわりり候候たたりり候候たたりりとと  
 候候たたりりととああままれれのの候候ととししととああままれれととししととああままれれ



よのひ車月金彦兼は天まこと引くく三方地  
花とぬく酒よひくこれとのめ病と除る  
たうらひのちん権を酒よ浸さひひまのちと  
用へしちま乃花と眠まれば鼻ぬいてくやまひ  
ちまよんえり

○まろこ一六信節一考姓名他乃律まはま内食  
とまろむろ総あり世國乃人とかぬすひくま事か  
たり信節ふ元りれ外上巳織午早文申元を湯や  
乃親方うこれ世俗の貴すの内行てとのくられま  
時食まろく意教一宴樂は志るるま考先程よすま

まほいんまろくよりひ又堂元ま事ら事ま  
りまろく亡に事らるるま事らるるま  
やまろくいも内代果蔬もの類也晴食くハ上巳の  
草恒歳午乃粽中元乃蓮葉飯市湯の菊酒  
飯の類まろくもと盤まろりて盆市は酒之ハ一  
初ま雅慶とまろくむら総れ

○まろくハ今日曲水ハ真とんもハ川ハ上道遠  
一後後志と流水と鱗とろくろれ板の山茶と  
さるははよ精と他ろくその板と酒とけく飲  
まろくまろく酒と酒と酒と酒と酒と酒と



後裔流紀よりく晋乃武帝尚書執事虞山阿  
 やく三日の曲水をも義何とり扱や執事虞山阿  
 漢代章帝乃時平系れ徐肇二月初とゆく三人  
 乃女とせしり二日ひりて三人も小おぬ一村  
 の人ひく怪しめてこれとあ漢に接せし盟洗  
 一遂に流水よまるとうてこれとのひあはれ真  
 みるひ起まり帝のひくは依のひくまへ依事  
 ひりりり尚書郎東督こまをけくひく執事  
 治せしんふこれとあらんやむし周公トあし漢  
 邑とふし海あに因く危とふあ。逸乃あし

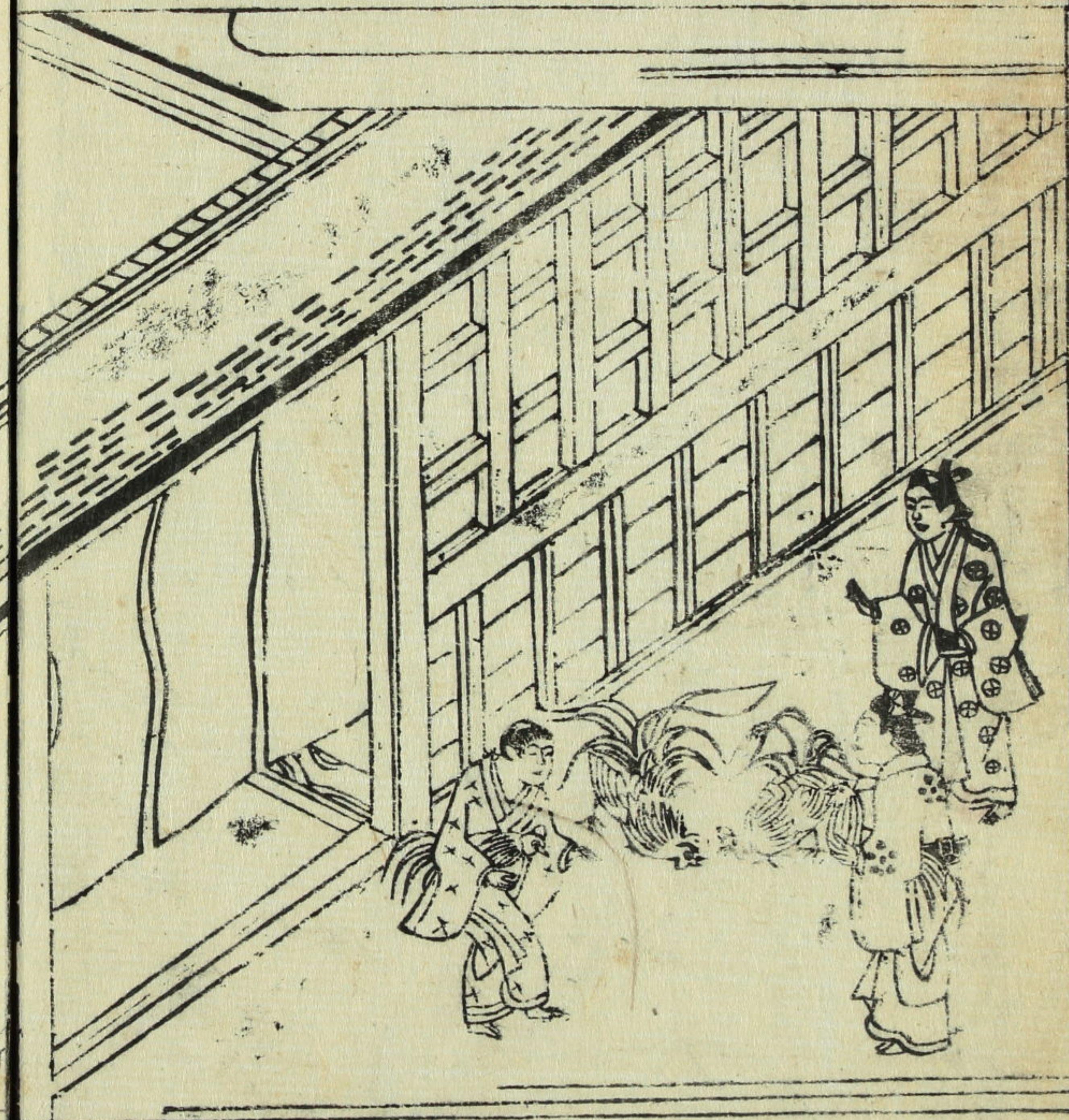
羽觴流波又秦代昭王二月と色墨流河必金人  
 てあ而も出水の初と扱しひく令君制有あ  
 及秦乃霸徳侯因此立あ曲水あ漢後漢とより  
 お取くこれ並事とひ帝乃ひく善金も中  
 東督の跡ひ執事虞山阿遠とく陽城乃令とせり  
 なるん志くれし東督の言と又一内附金人  
 けとあにあしひ又凡士記も後漢の鄭虞山  
 とあげゆりしり後漢書禮儀志一三月と己  
 五續飲子至流水ととりて漢代はとてよと  
 りし鄭虞山阿とあしあしとて鄭乃國の俗



三月乙巳日蘭とあるに定く石祥と被陰とあり  
 皆經代郵局より入るべき事なり  
 清くは海路より  
 舟れんる代給之一よき事なり  
蕭穎士撰飲序撰選  
 德也郵局者之蓋取法  
 勿萌意也陽氣敷地握芳蘭臨清川乘和風便用微介社為森海  
 矣源文粹卷之三三月其序云酒能出子物五撰飲也  
 我 羽ゆき外水内宮とびりる事 教宗王宮に  
 御事より始りりるは是を家 國あり其あり  
 乃氣の初居るより人々を中修えたる也  
 徳聖合梅は日本三月三日有桃花水宴とあり  
 教後文今よ定家はぬみま乃奇なり  
 是よりいよき事なり  
 又とある事あり

又今日諸会よりあり世後何事とくともあり  
 乃事より明かしくしるはる事あり  
 一にかたりてはよりしるはる事あり  
 治給始とあるとあり  
 明皇ハ乙酉の年  
 一より





梅舟房言



こつと書よわたり玉物玉典よ多食の齋市  
 各罪の關一々を裁くはとて又渡明代り諸  
 とたろくそくせしぬりもきし、さや侍りたよ  
 とつろた乃氣の成事、清のり代事なり  
 かち事くそ我、國をい日難合とらしむおま  
 關總代事、たは徳よ及えはれ、いけ下りまき  
 〇い日艾とを紙くすよ、うけ風ふけし、事一用て  
 ろし、平金尾、今よ及く下り、又據年よあも下なり  
 〇今日のわく、このぬり、事よいぬか、りそひえ  
 し、たれた人形と、いわく、ねと、り、むか、あま、びの  
 事、を、係、氏、物、係、を、く、も、及、て、侍、れ、ぬ、事、一、の、ら

一、り、より、又、係、氏、上、十、二、の、ま、り、ぬ、り、人、い、ひ、か、れ、る、を  
 ひ、い、つ、ま、え、く、の、ま、の、と、あ、ま、く、十、一、の、り、ら、く、そ、と、家  
 事、を、く、又、遠、ま、く、事、た、た、人、形、も、衣、振、と、ぬ、り  
 て、ま、世、帯、あ、く、ま、女、く、と、れ、と、い、あ、く、さ、る、り、り  
 係、氏、よ、か、く、方、あ、ま、く、い、は、り、ま、り、く、人、一  
 係、氏、よ、り、り、抄、入、ま、く、の、三、事、ま、て、これ、と、侍、り、ぬ、の、の  
 係、氏、よ、これ、と、事、ま、く、事、乃、く、う、は、つ、つ、れ、ぬ、り、り、さ、す、り  
 臨、日、は、係、今、日、と、三、月、終、り、し、り、あ、り、り、長、八、湯、針、乃、時  
 け、て、玉、字、融、く、よ、昔、未、終、り、し、事、事、也、同、人、の  
 無、親、を、和、暢、と、ら、り、ぬ、ん、ハ、花、貴、遊、し、て、元、く、さ、る



くく次をききうきふを言はばけつる日やさぞ郊野に  
ありきんふ歩不也降して新春と賀し春とど  
海一後撰集一凡河内躬恒の奇

つれてさしつらふふたは喜め日とほひかまそ  
ふふふふふん玉璽集に三月のたけなと大徳の  
あふすうたれそくであらふるの終とまう  
くはつらん又あ大徳ふふ喜のまう  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

賈島の三月三日晴劉評更詩

三月三日風光別我苦吟身世已今夜不  
須睡未眠曉曉曉是春

清明三月二日茶乃日とを食と云い日らうくく六毎

先此れ墓前と掃塗して墓とまひのゆるく  
これらうくくくくくくくくくくくくくくくくく  
念と十月朔日展墓不可為事本初生初死を  
在禮と志ありくくくく日祀先乃墓前よりて後場

い月秋威及交友と餐すくくく凡瘠く食と事か  
て厚くくく豊約るれ可に常くくく主人のくく



害と老教一々整養とみびくは又唐書に  
て終と失之くす又浦とややくをく人びく  
先礼二及有くは世信祝威男女と家とく不替  
と扱ぐ御樂を御心人情と直一何事と志す  
致子志ふは已く一懐くまくく人く平好  
徳後樂たもくち可きくく

三月治屋之御以行幕致と回安曆子と記  
二月菜蔬花多よ菜まもく種一と菜  
初又ハ中初ようえアト一とをれハ何く  
有凡蜀黍玉蜀黍著坊鳥羊紅豆豆豆豆豆豆  
豆志豆豆刀豆胡麻薑眉豆豆豆豆豆豆豆  
荊芥香蒿芥といひ月乃菜のくく

紅豆を三月の中より初と種と下一又月の菜ま  
さくくくゆきくくれ菜のくく久一地事温  
まかくくくゆき一凡菜蔬とゆきくく  
くくくれはあ一やまく菜のくく  
ゆきあり又その地事ハ  
久一又ひ月本と扱下一松橋柑柿香梅乃影



清明乃あ後二携てりしと月令廣義ノ尺ハナリ  
 ？この蕨と九斗して所とらるる日ノ一ノ三ハナリ  
 かつ一唐と漢とて又日に傳收玉一ノ食とる何  
 湯一ひしつらつる者如式とて蕨と判の乞也  
 穀書乃徳多り或垣淹行して筆一ノ垣廠ハ乾廠  
 一とされりいんとな是ハ垣廠ハ年やと干廠  
 野くちと信又用ひつ一ノ又蕨と狗脊と垣淹一  
 元死のけりもハち書乃後七午又日と期とる一ノ  
 蕨好り書一とて今世於郡ハひくある樹を  
 去去れ後二十日といふと登れ野とす新野ハ一ノ

春をこま書ハ後六中又日とて花候とす年  
 ノ初臘にりしと山下にりてとこ一連連  
 一とありたりは冬良多部乃ハ色候をひく  
 極二十日ありたりと一蕨とてとるの上ハ  
 一花候とありと一書一旬二旬或一月也  
 化和青ハ極ハ法中よりととるく候とる  
 冬に紅もハけりともちりたり  
 此月小蒜及雛子とて又一又禽獸乃又臘と食  
 事たのハ生雜障麻肉と今とてと凍道とと  
 瘡毒熱病と食ハ並ととハ根ととす  
 月令廣義ノ尺  
 春の養生



後まゝのうとくせと殺まゝのうとくして天透小竹のうとく  
あゝ命と近しむるまのん其花葉と合ひやると  
魚鱗と合ひて化せられず家産をたぬり

三月八日候卯一桐始新才二田鼠化爲鴛才三野  
見七清所の二候あり申に洋路生才八吹雪拂  
其候才六載勝降于桑七穀るの二候才ト  
清明八昼八十二刻十分夜八十七刻八十分穀る  
至五十四刻十分夜八十五刻五分月令慶長

日本書紀時記卷之二一畢



